走りの原点ここに

トヨタ自九州マラソン選手 今井正人さん ＝2002年度卒

福島県立原町高 1

「母校をたずねる」は今月から福島県南相馬市の県立原町高編を掲載します。創立82年の同校は各界に多彩な卒業生を輩出しています。トヨタ自動車九州のマラソンランナー、今井正人さん(37)＝2002年度卒＝は「ランナーとしての原点は間違いなく高校時代」と言います。箱根駅伝の山登りの5区で区間記録を3年連続更新した「元祖・山の神」は、高校時代に「世界」を意識し、マラソンで勝負するという気持ちを強くしたそうです。【高橋宗男】

野球に夢中でしたから、地元の強豪・双葉高（同県双葉町）に進学するつもりでした。でも中3の11月にあった市町村対抗駅伝で中学生のエース区間で全体の2位になり、全国大会の都道府県対抗駅伝の代表にも選ばれました。「頑張っただけ結果が出る陸上競技って面白い」と、駅伝を強化していた原町高に進路を変更しました。

ただ陸上競技のことは何一つ知らず、恩師の畑中良介先生に一から教えてもらいました。なぜこの練習をするのか。それがどこにつながっていくのか。初めは解説だったのが、「なぜだと思う」という問いかけに、そして「どうしたい」というコミュニケーションとなり、自分で理解し、納得してから練習を始める癖をつけてもらいました。

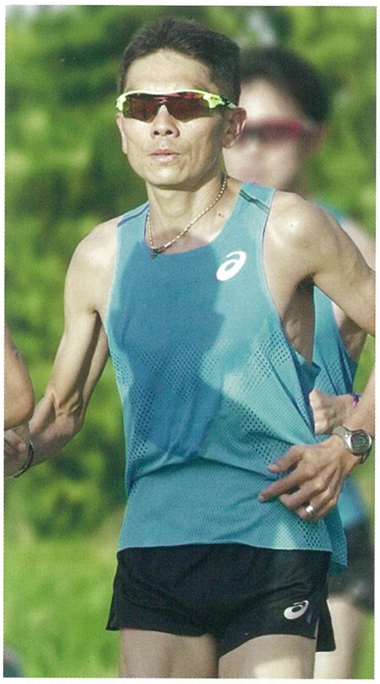
2年の時、世界ユースの日本代表に選ばれ、「ケニアやエチオピアの選手はもも上げやバウンディング（ジャンプトレーニングの一つ）などの『動き作り』をしっかりやっているよ」と先生に指摘されました。当時の僕はリズムよく大きく体を動かすことがうまくできていなかった。「アフリカ勢の強さの秘訣はそこにある」と世界を意識させていただきました。そして、先生から「日本人が世界で勝てるのはマラソン」と言われ、僕も「マラソンで勝負したい」と思うようになったのです。「世界で戦いたいなら、これぐらいはやろう」という高い意識が、日々の練習にありました。

アフリカのランナーのように不整地のコースを走るクロスカントリーも練習に取り入れ、伝統行事「相馬野馬追」が行われる雲雀ケ原祭場地などの芝生やダートを走りました。不整地を走ると集中力が上がり、足場が軟らかいと体幹が鍛えられる。ラストスパートやペースの切り替えに、そうした練習は生きます。

海開き前の砂浜を裸足で2時間走ったこともありました。砂は熱いし、2時間も走るとマメができてしまう。暑い中でどう集中力を維持するか、タイム以外を鍛える練習だったと思います。そんなふうに田舎の環境だからこそできる練習を取り入れて、それを自分たちの強みにしようとしていました。常に新しいアイデアにチャレンジしていたような気がします。

3年時の駅伝県大会は地元のコースで、3区の僕は学校の横を走りました。みんな授業を止めて応援してくれ、今思い出しても感動的なすごい声援でした。でも、結果はライバルの田村高に敗れて2位で、仲間と「涙が枯れるとはこういうことか」というほど泣きました。悔しくてしょうがなかったけれど、仲間と本気になって取り組んで、やりきって卒業できたという思いはあります。

高校時代に掲げたオリンピックのマラソン代表という目標はまだ達成できていません。次のパリ五輪を念頭に置きつつ、一本一本の試合に全力を尽くし、それが先につながっていくのだと思っています。



＝熊本県阿蘇市で、トヨタ自動車九州提供

いまい・まさと　1984年、福島県小高町（現・南相馬市）生まれ。高校で本格的に陸上競技を始め、進学した順天堂大では箱根駅伝で活躍。トヨタ自動車九州では2年目からマラソンに取り組み、2014年別府大分マラソンでサブテン（2時間10分切り）。15年東京マラソンで日本歴代6位（当時）の2時間7分39秒を記録。同年の北京世界選手権代表に選ばれたが、大会直前の故障で欠場を余儀なくされた。

目標は地域との連携

原町高校は1939（昭和14）年に福島県相馬商業学校として創設された。学制改革のあった48（同23）年に原町高等女学校を合併して原町高となった。在校生や卒業生、地元の人たちから「原高（はらこう）」と親しまれる。

75（同50）年に現在地に移転し、県内の高校でも有数の約8万平方㍍の広大な敷地面積を誇る。専用の野球場や陸上競技場、サッカー場のほか、4面のテニスコートを有する広々とした環境の中、「規律・協同・責任」という校訓の下で「自主自立」「文武両道」の校風を育み、継承してきた。

卒業生は各界で活躍し、特に県内政界に人材を輩出。現職首長には木幡浩・福島市長（78年度卒）、門馬和夫・南相馬市長（71年度卒）、遠藤雄幸・川内村長(72年度卒)らがいる。

また、将来の人材育成を見据えた県の「福島イノベーション・コースト構想」でも、太平洋岸地域「浜通り」の未来を担うトップリーダーの育成を期待されている。教育関係と医療従事者の育成という特色を強めるための準備を進めており、山崎雅弘校長は「地域との連携、高校と大学の連携を深め、この地域に必要な人材を育成していきたい」と抱負を語る。

＝次回は18日に掲載

桜に映える原町高の校舎＝同校提供

卒業生「私の思い出」募集

福島県立原町高校卒業生のみなさんの「私の思い出」を募集します。300字程度で、学校生活や恩師、友人との思い出、またその後の人生に与えた影響などをお書きください。

卒業年度、氏名、年齢、職業、住所、電話番号、あればメールアドレスを明記のうえ、〒100―8051、毎日新聞地方部首都圏版「母校」係（住所不要）へ。メールの場合はshuto@mainichi.co.jpへ。いただいた「思い出」は、紙面や毎日新聞ニュースサイトで紹介することがあります。

ぐるっと東日本

母校をたずねる

私のドキドキ大冒険

アナウンサー 佐藤ちひろさん＝2015年度卒

福島県立原町高 ②

テレビ朝日入社2年目のアナウンサー、佐藤ちひろさん＝2015年度卒＝は、福島県立原町高2年の時の「大冒険」が、自分を変えるきっかけになったそうです。東日本大震災を福島県南相馬市で中学1年の春に経験した際、しなやかな感性で、心に届く言葉の「力」に感動し、現在の道を志しました。【近藤浩之】

原町高には中学の友達の多くも進学して、1年生の時は放課後に空き教室で一緒に踊り、中学時代の延長のような楽しい日々を送りました。2年生で試験の成績が良いと入れる「特進クラス」に移りました。でも1年から持ち上がりの生徒が多く、途中で入った私はなじめずとても寂しくて、入った直後に「学校から逃げよう」と決心しました。

遅刻もしたことのない真面目人間でしたから「親に知られたら怒られる」と怖くなり「そうだ、家からも逃げればいい」と、平日の朝5時に起きて自転車に乗り、福島市にある祖父母の家を目指したのです。

ところが、阿武隈山地の山道に入り飯舘村との境にある八木沢峠の手前できつくなったのです。行き交う車の運転手さんもみな不思議そうに見て、恥ずかしいしつらいし「朝から何やっているんだ」と思い、2時間で家に帰ってしまいました。恐る恐る玄関を開けると母が冷静に「何してるの？」とひと言。結局遅刻もせずに学校に行きました。

私にとってはドキドキの大冒険でした。でも、誰にもさほど興味を持たれず、学校生活も普通に進みました。「自分が恥ずかしがらずに何かをやれば、相手は何も思わないかもしれない」。そう気づいたら、同級生に普通に話しかけられるようになったのです。人見知りが激しかったのかもしれません。自分が一歩前に踏み出す際のハードルが、あの日から下がりました。

そして、新しく友達もできて、高校生活がとても楽しくなった。勉強も頑張りましたが、3年生の体育祭の仮装行列でアラレちゃんの衣装を一生懸命作って先生たちにほめられたことなど良い思い出です。

部活動の「数科学部」では年に数回、地元のショッピングセンターで子供たちとスライム作りや紙すきをして楽しく遊び、子供たちの開放感あふれた笑顔をよく覚えています。高校の友達とはいまでもよく連絡を取り合っています。

アナウンサーを志したきっかけは、東日本大震災後の中学2年の夏休み、ハンガリーのある自治体が被災地の生徒を招待する企画を知り応募したことです。約2週間滞在した際、現地のテレビ局の生放送で被災地の様子を話す機会がありました。すると放送の2日後、宿泊先に高齢の女性が訪れ、手を握りながら「頑張ってね、祈っているよ」と、練習してきたという日本語で声をかけてくださったのです。「言葉は、知らない誰かが行動を起こしてくれるほど心に届く力を持っている」と驚き、心から感動しました。

目指すのは「命や暮らしを守れるアナウンサー」です。震災時、どうすればよいか分からない中で頼りになったのはテレビやラジオの情報でした。私も、災害時などに頼りにされる仕事に携わりたいと思っています。

＝東京都港区で、内藤絵美撮影

さとう・ちひろ　福島県いわき市生まれ。中学から南相馬市。2020年、早稲田大学商学部を卒業しテレビ朝日に入社。現在「しあわせのたね。」（土曜午前9時55分～）ナレーションと「BS／CS1654ニュース」金曜を担当。南相馬の海が好きで、津波発生後に父と海岸を歩き惨状にがくぜんとしたが、大学生の時再訪、穏やかさに感動し「私のふるさとだ」と再認識したという。

保護者ら協力、校舎内拭き取り

保護者の協力を得て校舎内の拭き取り掃除をした＝2011年10月撮影、原町高提供

福島県の浜通りに位置する原町高は沿岸部のほかの学校と同様、2011年3月11日の東日本大震災や、その後の東京電力福島第1原発事故に翻弄（ほんろう）された。第二体育館は津波で亡くなった人たちの遺体安置所になり、警察は敷地内の同窓会館を待機所とした。自衛隊も4月下旬から6月まで第一体育館や格技場、同窓会館を拠点とし、沿岸部の復旧作業に当たった。

福島第1原発から30㌔圏内の南相馬市原町区は緊急時避難準備区域に指定され、同校は他校の間借りを余儀なくされた。在校生や教職員は相馬高（相馬市）と福島西高（福島市）に分かれ、5月から約半年間学校生活を送る。南相馬市の校舎に戻ることができたのは震災発生から7カ月以上たった10月26日だった。

当時、教頭として母校に勤務した大沼博文・福島県文化振興財団理事長（1976年度卒）は「校舎の壁や敷地の除染は完了していたが、校舎内はまだ。保護者らの協力を得て、教室や廊下、机、イスなどをすべて拭き取りました」と振り返る。

13年3月には熊本県立宇土中高の生徒が原町高を訪問し、両校の交流が始まった。大沼さんは「熊本地震（16年4月）では原町高などから学んだことが役立ったそうです」と話す。【高橋宗男】

＝次回は25日に掲載

卒業生「私の思い出」募集

福島県立原町高校卒業生のみなさんの「私の思い出」を募集します。300字程度で、学校生活や恩師、友人との思い出、またその後の人生に与えた影響などをお書きください。

卒業年度、氏名、年齢、職業、住所、電話番号、あればメールアドレスを明記のうえ、〒100―8051、毎日新聞地方部首都圏版「母校」係（住所不要）へ。メールの場合はshuto@mainichi.co.jpへ。いただいた「思い出」は、紙面や毎日新聞ニュースサイトで紹介することがあります。

ぐるっと東日本

母校をたずねる

福島県立原町高 ③

放送委「今」に続いた

映画プロデューサー　若松央樹さん　＝1986年度卒

フジテレビの映画・アニメ事業センター局次長職ゼネラルプロデューサー、若松央樹さん＝1986年度卒＝は「高校時代って、いろんなものを知って、いろんなことをやってみる時間ですよね」と振り返ります。「私は結果的に好きなことを仕事にできました。後輩のみなさんも、何かをみつけてほしいですね」と在校生にエールを送ります。【高橋宗男】

高校時代は、好きなことばかりやって、楽しんでいました。女の子とどう付き合おうかなんてことばかり考え、本当に思春期という感じでした。実は私が在学していたころ、父（丈太郎さん）も原町高で国語を教えていました。悪さはできないので、「おやじ、早く転勤しないかな」と思っていました。

今の仕事につながるとしたら、放送委員会での活動でしょうか。先輩に引きずられるように入ったのですが、NHK杯全国放送コンテストに毎年応募していました。

結構真面目に作り、全国大会にも進んだはずです。例えば「高校野球の選手たちはなぜ丸刈りなの」という作品。野球部員や顧問の先生、高野連の人たちにもインタビューして、「決まりはないのに何で丸刈りなのか。おかしいじゃないか」という論調で、7、8分にまとめました。これがかなり受けましたね。

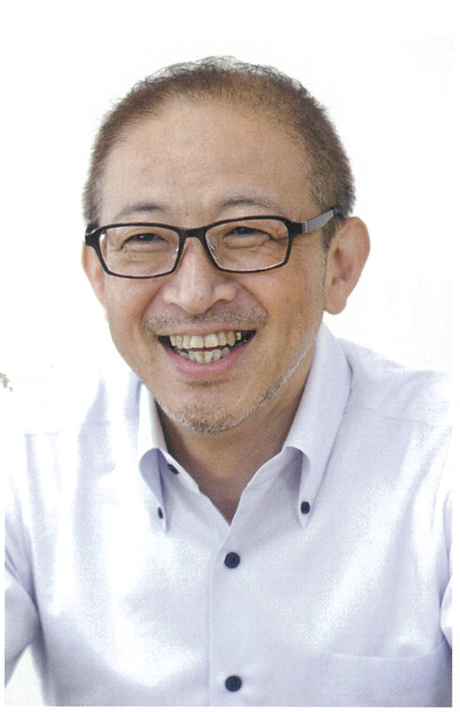
シリアスな作品も作りました。原子力発電所をテーマに「そんなに安全なら東京に作ればいいじゃないか。なぜ福島なのか」というラジオ番組です。この作品は父の影響かもしれませんね。学校で教えながら詩を書いていた人で、ウクライナのチェルノブイリまで取材に行って、福島での原発事故の可能性について危惧していましたから。

休み時間の10分間でどうやってきれいに「早弁」するかというビデオ作品も作りました。おかずのバランスや配置をどうしたら早くおいしく食べられるかを考えました。シリアスなのからばかばかしい作品まで、幅広くやっていましたね。

高校時代に映画の仕事に就こうと思っていたわけではありませんが、よく映画を見ていました。町中の映画館「朝日座」と親戚だったこともあって、上映作品はほぼ全て見ていました。当時はテレビでも毎日のように映画を放映していました。年間に何本見られるかと、映画日記を付けたりしていました。

浪人して入った早稲田大で演劇と出合いました。映画サークルはそれほどでもなかったけれど、演劇はハイレベルで格好良かったのです。卒業後は日本テレビに就職しましたが、営業職に異動したこともあって「どうしても制作に携わりたい」という気持ちが強くなり、2003年にフジテレビに移りました。

今は映画一本です。大ヒットした「フラガール」（06年、李相日監督）には「やられた」と思いました。地元の福島にこんなドラマがあったのかと。「翔んで埼玉」（19年、武内英樹監督）をプロデュースしましたが、「福島」で何かやりたいな。古里を題材にした作品を手がけたいです。



＝東京都港区で、藤井太郎撮影

わかまつ・ひろき　1968年、福島県原町市（現南相馬市）生まれ。92年早稲田大卒。日本テレビからフジテレビに移り、ドラマ「のだめカンタービレ」（2006年）「最後から二番目の恋」(12年）などのプロデュースを担当。映画「翔んで埼玉」（19年）で第38回藤本賞の特別賞、第44回エランドール賞のプロデューサー賞を受賞。木村拓哉さん、長澤まさみさんが出演の最新プロデュース作「マスカレード・ナイト」が9月17日に公開される。

文化部　全国的に活躍

箏を弾く伝統文化部員
＝福島県立原町高提供

若松さんが所属した放送委員会はその後、「部」に改称され、1991年度のNHK杯全国高校放送コンテストのラジオドキュメンタリー部門で最優秀賞を受賞している。

原町高の文化部は全国的に優れた活動をしてきた歴史がある。古くは演劇部が1968年の全国演劇コンクールで優勝。最近では吹奏楽部が2018年の東日本学校吹奏楽大会で、福島県勢として初の金賞に輝いた。また、部活動ではないものの、教科の家庭科の内容を発展させた活動をする家庭クラブは90年代に全国家庭クラブ研究発表会の最優秀賞を何度も受賞する常連だった。

伝統文化部というユニークなクラブもある。箏（こと）を弾く「箏曲部（そうきょくぶ）」だ。県内でも3～4校にしかないが、原町高は3年生の引退後も1、2年生だけで21人の部員が所属し、一昨年には3年生部員が箏を専門として東京芸術大に進学した。

また、1948年創刊の校内紙「原町高校新聞」は第5号から新聞部の発行に移行し、創刊から現在まで全号を完全保存している。教員として母校に16年勤務した山崎健一さん(63年度卒）は「完全保存は全国でも珍しいのでは。原高の『お宝』です」と話す。

＝次回は9月1日に掲載

卒業生「私の思い出」募集

福島県立原町高校卒業生のみなさんの「私の思い出」を募集します。300字程度で、学校生活や恩師、友人との思い出、またその後の人生に与えた影響などをお書きください。

卒業年度、氏名、年齢、職業、住所、電話番号、あればメールアドレスを明記のうえ、〒100―8051、毎日新聞地方部首都圏版「母校」係（住所不要）へ。メールの場合はshuto@mainichi.co.jpへ。いただいた「思い出」は、紙面や毎日新聞ニュースサイトで紹介することがあります。

ぐるっと東日本

母校をたずねる

個性的な先生、友達

児童文学作家　菅野雪虫さん　＝1986年度卒

福島県立原町高　4

ファンタジー作品を世に送り出している児童文学作家の菅野雪虫さん(52)＝1986年度卒＝は、福島県立原町高時代の個性的な同級生との語らいが現在につながっていると振り返ります。外の世界を見てみたいという思いは入学前からあり、校則の厳しさに悩まされながらも先生や同級生との交流からさまざまな気づきがあった3年間だったようです。【松本信太郎】

両親はともに教師という家庭で育ちました。仲の良かった1歳上の姉が相馬市内の高校へ進学していたのですが父から「少し離れた方がいいんじゃないか」と言われ、中学の友達が原町高へ進むと聞いたので私もそうしました。でも本心はあまり行きたくなく、早く家を出て働きたかった。

当時、川崎市にあったガラス工芸の専門学校へ手紙を書いて尋ねたところ、入学書類一式とともに「高卒程度の学力はつけたほうがいいですよ」という添え書きもつけて返信をくれました。丁寧な対応に感動し、「とりあえず高校は行くか」と決心しました。

一番の思い出は駅から遠くて登校するのが大変だったことです。自宅から最寄りの鹿島駅まで自転車で行って電車に乗り、原ノ町駅からまた自転車で20分ペダルをこぎました。浜通りなので冬に雪は積もりませんでしたが、雨の日はバスが超満員になるので嫌でした。毎日通うことに疑問を感じて、3年生のころはたまにサボったりしてましたね。

校則は服装について厳しく、靴下は白色厳守でした。寒い季節になってもカーディガンを着ることは禁止されていて、自転車で帰ろうとした際に持っていたカーディガンを着たら、風紀を指導する先生に乗用車で追いかけられました。

先生との思い出もあります。2年生の時に担任だった国語の先生は教科書を教えるだけでなく、授業で取り上げた作家のちょっとしたエピソードを教えてくれました。また、自身がアメリカやヨーロッパなど世界各地を旅行してきた話をしてくれました。センスの良い服をいつも着ている先生で、わくわくしながらそれを聞いていました。

先日亡くなった若松丈太郎先生（詩人、1935～2021年）の漢文の授業も漢字は苦手でしたが頑張って受けました。作家・島尾敏雄の研究者だった影響で、島尾敏雄・ミホ夫妻の本を読むようになりました。2年前には2人の出会いの舞台となった奄美大島まで旅をし、そのことを書いた手紙を送り、やりとりをさせていただきました。

友達には本当に恵まれました。前身が商業高だった名残からか男女が別々のクラスだったので友達は女子ばかりでした。留学から帰ってきた子、都会から引っ越してきた子、同人誌を作って売りさばく子……。個性的な友達がいました。彼女たちと将来のことを話し合ったり、東京へ大学受験の下見に行ったりしたのが今につながっています。

先生や友達のおかげで3年間、「原高」へ通えたのだと思います。

＝東京都国立市で、藤井太郎撮影

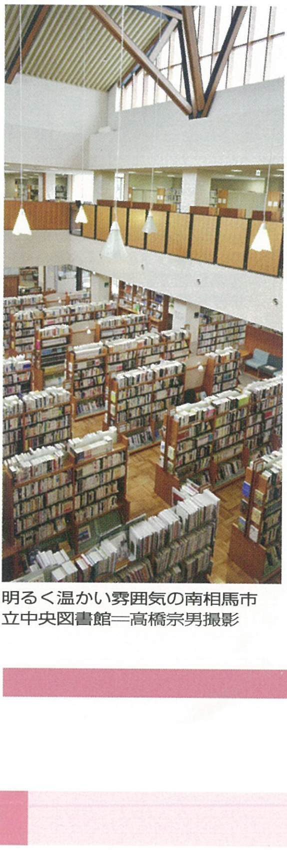
すがの・ゆきむし　1969年生まれ。百貨店で美容部員としての勤務を経て2002年、「橋の上の少年」で北日本文学賞を受賞。05年、「ソニンと燕（つばめ）になった王子」で講談社児童文学新人賞を受賞し、以降「天山の巫女（みこ）ソニン」シリーズ（講談社）を刊行。近著に「女神のデパート」シリーズ（ポプラ社）や「ランペシカ」（講談社）など。

卒業生「私の思い出」募集

福島県立原町高校卒業生のみなさんの「私の思い出」を募集します。300字程度で、学校生活や恩師、友人との思い出、またその後の人生に与えた影響などをお書きください。

卒業年度、氏名、年齢、職業、住所、電話番号、あればメールアドレスを明記のうえ、〒100―8051、毎日新聞地方部首都圏版「母校」係（住所不要）へ。メールの場合はshuto@mainichi.co.jpへ。いただいた「思い出」は、紙面や毎日新聞ニュースサイトで紹介することがあります。

南相馬市立中央図書館と度々コラボ


明るく温かい雰囲気の南相馬市立中央図書館＝高橋宗男撮影

原町高の最寄り駅、JR常磐線原ノ町駅から徒歩1分の駅前に南相馬市立中央図書館はある。ふんだんに木材を使い、高窓から明るい日が差し込む温かみのある図書館だ。蔵書検索で菅野雪虫さんの名前を打ち込むと、著書（共著を含む）35冊がヒットした。

「郷土（南相馬市）出身の作家ですからね」と、原町高OBの石川智浩館長＝1985年度卒＝が説明してくれた。直接の面識はないものの、2019年の開館10周年の際には、菅野さんからメッセージ色紙が寄せられたという。

図書館と原町高はこれまで度々、コラボレーション企画を行ってきた。図書委員会が15～18年の4年間、図書館2階のティーンズコーナーで「この本を読め！そして冒険せよ！」などといった企画展示をしたほか、19年には美術部が読者や本をテーマとした作品を作成し、展示した。

以前は電車通学の生徒らが、屋外テラスでおしゃべりに興じながら下校の電車を待っていた。コロナ禍の昨年以降は定期試験前に試験勉強に励む姿が目立つという。石川館長は「きっかけはなんでもいい。一度ここに来てくれたら、本を借りてみようと思ってもらえるのでは」と、在校生に来館を呼びかけている。【高橋宗男】

＝次回は8日掲載

ぐるっと東日本

母校をたずねる

友の刺激でてっぺん目指す

サッカー日本代表専属シェフ 西芳照さん ＝1979年度卒

福島県立原町高 ⑤

サッカー日本代表の専属シェフとして海外遠征に同行し選手を支えている西芳照さん(59)＝1979年度卒＝は、福島県立原町高時代に一緒に遊んだ仲間たちの活躍を励みに「俺も負けないように頑張ろう」と、人生を歩んできたそうです。当時の校長の言葉が印象に残り「高校で学んだことを誇りに思って生きてゆけよ」というメッセージが込められていたのだろうと、今振り返ります。【高橋宗男】

＝福島県いわき市で、高橋宗男撮影

小さいころから物作りが好きだったこともあって、自宅から一番近い工業高校に進むことも考えていました。ただ、二つ上の姉が原町高に通っていて、両親の勧めもあったものですから、原高に進学しました。

当時は「男女共学」というより「併学」で、希望進路によって選択科目が分かれる2年から理系だけ「共学」クラスでした。私は3年間ずっと男子クラス。男子の教室は校舎の東側、女子は西側なので、男子と女子の動線が違い、今でも知らないままの人が多くいます。

1年時の担任は大学を出たばかりの守谷早苗先生でした。男性で、名前は早苗さん。みんなで「さなえちゃん」って呼んで、お兄ちゃんのように慕っていました。今でもクラス会のときはそう呼んでいます。

1年の時、合唱コンクールで優勝したことを覚えています。早くして亡くなってしまったけれど、（南相馬市立）小高中などを全国大会に何度も連れて行った優れた吹奏楽指導者の北野英樹君が同じクラスにいました。彼が「翼をください」を編曲し、彼が言う通りにみんなで歌ったら勝ってしまったのです。例年なら3年生の女子クラスが優勝するのですが、1年の男子クラスだったので、ブーイングが上がってしまいましたね。

ただ、思い返すと、私の高校時代はあまりほめられたものではありません。自宅最寄りのJR常磐線小高駅から電車通学でしたが、ほかの高校も含めて「友達の輪」が広がっていきました。何をするかというと、みんなで集まってはマージャンとか悪だくみばかり。授業を抜け出して、自転車で10キロぐらい離れた旧鹿島町（南相馬市鹿島区）の烏崎まで海を見に行ったりもしていましたね。

卒業した年の夏、東京の予備校に通っている時に居酒屋でアルバイトをしました。私はウエーターでしたが、調理をしている人を見て「こういう仕事は面白そうだ」と思ったのです。

調理の道に進んでからも、高校時代に一緒に遊んでいた仲間の近況が耳に入ってきました。医学部に進んだりして、みんな頑張っていて、刺激になりました。「負けたくない。おれもこの道でてっぺん取ろう」と背筋を伸ばしたものです。

在学していたころの山口研次校長の言葉を思い出します。スピーチの最後は必ず「光は原高から」と言って締めるのです。わあーっと拍手が上がった。あのころはどんな意味が込められていたのか深く考えることもなかったけれど「原高を卒業したことを自信にして頑張りなさい」「地域に貢献しなさい」「そういう人間になるんだよ」と、そんなメッセージだったのかなと今になって思います。

にし・よしてる　1962年、福島県小高町（現・南相馬市）生まれ。サッカー施設「Jヴィレッジ」（同県楢葉町、広野町）の総料理長を務め、2004年からサッカー日本代表専属シェフ。W杯ドイツ大会（06年）、南アフリカ大会（10年）、ブラジル大会（14年）、ロシア大会（18年）に同行し、次回のカタール大会（22年）が5回目のW杯。同県いわき市鹿島町でレストラン「NISHI'S　KITCHEN」を経営。

校舎火災を機に毎年開催

60年の歴史誇る合唱コンクール

西さんが優勝の思い出を語った合唱コンクールは60年の歴史がある原町高の一大行事だ。1959年に第1回コンクールが行われ、62年以降、毎年実施されるようになった。

58年度前期の生徒会長を務めた太田潤さん＝59年度卒＝が「原高小史 合唱コンクール余話」と題し、創立70年記念誌に寄稿している。57年7月に起きた15教室を焼く校舎火災の影響で、臨時教室での授業を強いられ、学校行事も中止されるなど、当時は校内の士気が低下していたという。生徒会は58年に学校行事の再開や合唱コンクールの開催を申し入れ、学校側も了承。第1回コンクールは59年5月に男声、女声、混声の3部門で盛大に開催された。

70年代にコンクールの課題曲として歌い継がれた「いつまでも」は、合唱部員だった今村眞哉さん＝70年度卒＝の作曲だ。

例年6月に開催され、各クラスは4月から練習に励む。2019年は南相馬市民文化会館「ゆめはっと」で行われ、教育実習生らもパフォーマンスを披露し、コンクールを盛り上げた。ただ、コロナ禍のこの2年は実施が見送られており、瀧本基教頭は「今の2年生はコンクールを知りません。なんとか状況が落ち着いてほしい」と、来年の開催を願っている。

2019年に実施された合唱コンクール＝原町高提供

卒業生「私の思い出」募集

福島県立原町高校卒業生のみなさんの「私の思い出」を募集します。300字程度で、学校生活や恩師、友人との思い出、またその後の人生に与えた影響などをお書きください。

卒業年度、氏名、年齢、職業、住所、電話番号、あればメールアドレスを明記のうえ、〒100－8051、毎日新聞地方部首都圏版「母校」係（住所不要）へ。メールの場合はshuto@mainichi.co.jpへ。いただいた「思い出」は、紙面や毎日新聞ニュースサイトで紹介することがあります。

ぐるっと東日本

母校をたずねる

野球一色から青瓷に没頭

陶芸家 志賀暁吉さん ＝1995年度卒

福島県立原町高 ⑥

2007年の第19回日本陶芸展で大賞・桂宮賜杯を史上最年少で受賞した陶芸家、志賀暁吉さん(44)＝1995年度卒＝は福島県立原町高時代は「野球一色でした」と振り返ります。陶芸の中でも難しいとされる青瓷の制作に没頭する今の生活は、高校時代とどこか通じるものがあるそうです。【高橋宗男】

＝福島県新地町で、高橋宗男撮影

朝から晩まで野球でした。自宅は浪江町で、JR常磐線浪江駅から自転車で30～40分かかり、朝は5時起き、5時半前には自宅を出ていました。学校には7時前に着いて野球部の朝練です。自主練習なのですが、部員が多く集まっているときは打撃練習やノックもしていましたね。

3時間目の後の休み時間には弁当を食べ終えていました。昼休みには野球部員が体育館に集まって綱登りなどの体力作りに励みます。放課後の本番の練習が終わって、自宅に帰り着くともう午後10時。風呂に入って、夕食をとってから素振り。疲れ果てて寝てしまいますから、勉強をする時間がありませんでした。

夏の福島大会前に、学校行事の球技大会があるのですが、野球部員は出場しませんでした。

バレーボールとかバスケットボールとか、いろいろな競技があるけれど、野球の大会前にけがをしてはいけない。先輩からの引き継ぎ事項で、野球部の習わしでした。

僕らの代はたまたま1学年上の先輩が1人しかいなくて、1年の秋からみんなレギュラーでした。厳しい練習も「やれ」と言われたわけではなく「やらなきゃ」という雰囲気でした。練習を休むのも大みそかと元日ぐらいだったと記憶しています。

そんな毎日でしたから、授業中は眠くて、しょうがなかった。担任は3年間ずっと斎藤泉先生。担当科目は英語で、同じ浪江町の人でした。だからかどうか分からないけれど、私の「野球漬け」状況を理解してくれ「寝ててもいいぞ。ちゃんと卒業させてやるから」なんて言ってくれました。柔道部の顧問で一見怖いのですが、優しかったな。本当にお世話になりました。

大堀相馬焼の窯元に生まれましたから「焼き物はやらなきゃいけないな」と思っていました。3年夏に野球が終わり、進路を考える中で「日用品が中心の大堀相馬焼ではなく、一つの作品にじっくり手をかけていく陶芸家になりたい」と思うようになりました。

専門学校で陶芸の勉強をしている時、青瓷にひかれました。そのときは難しさを知らなかったのです。釉薬の厚みを出す必要があるので失敗が多く、10個焼いて、全て失敗することもあります。「青瓷で食べていくのは難しいから、やめておけ」という人もいるぐらいです。

でも、高校時代に野球一色だったように、青瓷にしか興味がありません。焼き物といってもいろいろありますよね。ところが他の焼き物については作れないし、説明するのも難しい。そういう性格といってしまえばそれまでですが、作りたいのは青瓷だけなのです。

しが・あきよし　1977年、福島県浪江町生まれ。陶芸家の実力日本一を決める日本陶芸展で2007年に大賞を受賞。透明感のある青緑色が特徴の青瓷が専門。11年3月の東京電力福島第1原発事故で、自宅や工房のある浪江町は帰還困難区域となっているため、14年に浜通りの新地町に移住した。東京都中央区の日本橋三越本店でこれまでに4回の個展を開催している。

野球部OBチーム、県内屈指の強豪に

今年7月まで順延された2019年マスターズ甲子園福島県大会決勝で優勝した原町高OBチーム＝7月3日撮影、志賀暁吉さん提供

現役時代はなかなか県大会を勝ち進むことができなかったという志賀さんは現在、原町高野球部のOBチームに所属している。実は、このOBチームは県内屈指の強豪に成長し、マスターズ甲子園福島県大会で快進撃を続けている。

マスターズ甲子園は2004年に始まった。全国の高校野球出身者が性別や世代、プロ・アマの壁を越えて、出身校別に同窓会チームを結成し、夢の舞台「甲子園球場」を目指している。

原町高OBチームは17年に誕生し、2年後の19年には県大会決勝まで進んだ。ところが決勝は県内全域を襲った大雨で20年に順延され、さらにコロナ禍で再度順延。こうして迎えた21年7月3日、原町高OBは郡山商OBを5―0で降し、初優勝を飾った。ただ、この優勝は「甲子園」には直結せず、22年に開かれる北海道・東北大会を勝ち抜く必要がある。

また、OBチームは今年のマスターズ県大会でも準決勝に進出。今年の大会は「甲子園」に直接つながっており、今後開催予定の準決勝、決勝を勝ち抜けば、22年に開かれる甲子園での本大会に出場できるという。

助監督の佐藤一彦さん＝1977年度卒＝は「我々OBチームの姿が現役球児の刺激になれば」と同窓会報に寄稿している。

＝次回は22日掲載

卒業生「私の思い出」募集

福島県立原町高校卒業生のみなさんの「私の思い出」を募集します。300字程度で、学校生活や恩師、友人との思い出、またその後の人生に与えた影響などをお書きください。

卒業年度、氏名、年齢、職業、住所、電話番号、あればメールアドレスを明記のうえ、〒100－8051、毎日新聞地方部首都圏版「母校」係（住所不要）へ。メールの場合はshuto@mainichi.co.jpへ。いただいた「思い出」は、紙面や毎日新聞ニュースサイトで紹介することがあります。

ぐるっと東日本

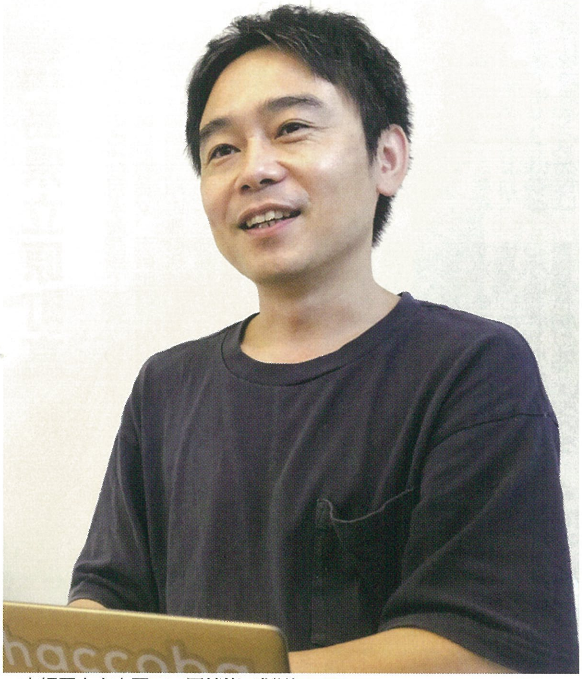
母校をたずねる

被災地に「夢」奏でたい

起業支援　和田智行さん＝1994年度卒

福島県立原町高 7

福島県南相馬市小高区で若者らの起業を支援する「小高ワーカーズベース」代表取締役の和田智行さん(44)＝1994年度卒＝は、2011年の東京電力福島第1原発事故で警戒区域となり、一時は無人となった旧小高町（小高区）で多様な事業創出に取り組んでいます。震災当時は子どもだった若い人材を育成するプロジェクトには、県立原町高の在校生も参加しているそうです。【尾崎修二】


＝南相馬市小高区で、尾崎修二撮影

小さいころから家業の織物工場を継ぐつもりでしたが「見聞を広めるため一度は東京の大学に行ったらいい」という親の勧めもあり、進学校の原高に進みました。

この辺りは当時から吹奏楽が盛んな地域です。私も小学校の鼓笛隊でトランペットを始め、中学では100人以上の部員を率いる吹奏楽部長として、東北大会に初出場しました。高校でも当然のように入部した吹奏楽部には、全国大会の常連だった原町二中（同市原町区）などから精鋭が集まっていました。みんな吹奏楽が大好きで、放課後の部活動はもちろん、朝や昼休みも空き教室で自主練習に明け暮れる日々でした。

ところが次第に勉強がおろそかになり、成績が低迷するようになってしまったのです。特進クラスにいましたが、成績の悪い2、3人は進級時に一般クラスの成績上位者と入れ替わる。僕も落っこちそうになりました。父親から「大学行くか、吹奏楽やるかどっちかだ」と迫られ、泣く泣く1年で退部を選びました。

帰宅部になってからは放課後に友達とカラオケに行ったり、ファンだった長渕剛さんの曲をギターで弾いたり――と高校生らしい青春を送りました。音楽はやはり好きで、大学でも続けましたし、社会人になって地元にUターンしてからも高校時代の友人らとバンドを組んでいました。

部活をやめた後も、勉強面ではそれほど成果は出ず、普通に青春を謳歌していました。でも3年生の夏になって突然成績が上がったのです。「できないなりにもやり続ければ花開く」という現在にも通じる経験則の原点だった気がします。

大学卒業を前に、親から「家業は継がなくていいが、家は継いでほしい」と言われ、自分で仕事を作ることができると考えてITベンチャー企業に入りました。2005年に起業し、小高に戻ってプログラマーとして東京の仕事をリモートで続けていました。そんな中で震災と原発事故が起き、避難を余儀なくされたのです。

避難指示の解除から5年がたった今、移住やUターンの若者たちが少しずつ集まってきています。課題の多い土地にはそれだけビジネスの種があるはずです。

「100の課題があるなら、100の事業を起こそう」という理念が少しずつ実現しています。

「この街には何もない」と地元を去って行った先輩や同世代を震災前から見てきました。でも、自分は「ないならつくればいいじゃないか」という考え方です。

相双地域（福島県北東の沿岸部）には大学がなく、原高の卒業生を含む多くの若者が進学や就職で一度は地元を離れます。彼らが将来、「地元に戻って地域の課題を解決する仕事をしたい」と思った時、その受け皿になりたいのです。

わだ・ともゆき　1977年、小高町（現・南相馬市小高区）生まれ。中央大経済学部卒。東京で複数のIT企業に勤務し、2005年にUターン。11年の震災後は埼玉県川越市、福島県会津若松市などで家族と6年間の避難生活を送った。14年に小高ワーカーズベースを設立。共同の仕事場であるコワーキングスペースの開設を皮切りに、食堂や仮設商店など多彩な事業を展開。19年に起業家らの拠点「小高パイオニアヴィレッジ」がオープンした。

大震災…地元で踏ん張る卒業生

東日本大震災直後の配達風景を収めた動画から＝藤原広幸さん提供

和田さんのように、人材育成に取り組むことで、地域の新生を模索する人たちがいる一方、地元に根を張って踏ん張ってきた原町高の卒業生も多い。奉仕団体「原町中央ロータリークラブ」の藤原広幸会長＝1978年度卒＝もその一人だ。

64年創業の新聞店の2代目社長である藤原さんは、原高在学当時から家業を手伝い、地域に新聞を届け続けてきた。

藤原さんは、2011年の東日本大震災直後も配達先の住宅が津波に流されている光景にがくぜんとしながら新聞を配った。

東京電力福島第1原発事故後の3月15日には避難を余儀なくされたが、同20日には配達を再開した。その背中を押したのは「今、新聞を配らないでどうするんだ」という、娘を津波で亡くした友人からの叱咤だったという。

17年には福島県飯舘村の避難指示解除に伴い、同村全域での配達も再開。「不便な場所でも待っている人がいる」と、情報を届け続けている。

藤原さんは「震災で家業の継続をあきらめざるを得なかった人たちもいる。地元を出て行った人も少なくない」と寂しがりつつも「学校は東京に人材を送る養成所ではないはずだ」と、原高同窓生の地域での活躍を期待している。【高橋宗男】

＝次回は29日掲載

母校をたずねる

3年生 出合ったB面の曲

オルガニスト 青田絹江さん ＝1980年度卒

福島県立原町高 ⑧

クラシック音楽のオルガニスト、青田絹江さん(58)＝1980年度卒＝は2013年12月、キリスト教カトリックの総本山であるバチカンのサン・ピエトロ大聖堂で、日本人として初めてクリスマスミサのオルガン演奏に参加しました。オルガニストを志したきっかけは、福島県立原町高時代に偶然手にした1枚のレコードだったそうです。【高橋宗男】

＝東京都文京区で、本人提供

小さいころからピアノや電子オルガン、油絵に日本画、茶道、華道、書道、剣道と、習い事の毎日でした。原高に入学後も書道と剣道以外は習い続け、中でも絵が大好きでしたから、美術部に入部しました。そのほかにも、合唱部に頼まれてピアノの伴奏もしていましたし、バンドも二つ掛け持ちしていました。

3年の春までは美大志望で、春夏冬休みに東京の美大ゼミに通っていました。でも6月ごろになって、母が偶然、私の小学校時代の校長先生と会い、私の進路の相談をしたのです。校長先生の娘さんで、地元で音大受験指導をしている名ピアノ教師の吉津恭子先生に翌日面談することになりました。でもそこで「今から音大受験なんて、とても無理よ」と一蹴されてしまったのです。

落ち込んで家へ帰りました。むしゃくしゃしたままレコードでも聴こうと、親が買ってくれた10枚組みのクラシック名曲集からなんとなしに1枚を取り出しました。ステンドグラスの写真がとてもきれいなジャケットの「バロック音楽への道」というレコードでした。そしてなぜかB面をかけたのです。

パイプオルガンの重厚な音色が流れてきて、稲妻が走ったかのような衝撃を受けました。バッハ作曲の「幻想曲とフーガ・ト短調BWV542」という曲。それまでパイプオルガンなど聴いたこともなかったのですが、「この楽器を弾きたい」と瞬時に思ったのです。すぐに吉津先生に電話をすると「私もオルガンが好きだったので、応援するわ」と言ってくださいました。

それからは嵐のような半年でした。学校の許可を得てお昼で早退して、正門前で待ってくれていた父の車でほぼ毎日、先生の教室へ通いました。当時、原高の音楽教員だった五十嵐啓一先生の紹介で、地元の声楽指導者、荒武敬先生の猛特訓も受けました。ピアノや楽典（音楽理論）、聴音と声楽を必死で勉強し、一般科目の授業中もほとんど楽典の勉強をしていました。

QRコードで演奏動画を（本人提供）

国立音楽大オルガン科に進み、ヨーロッパでの7年間の留学を経て、今はオルガンの指導、演奏活動、教会でミサの奏楽をしています。東日本大震災後は、東京や地元の南相馬市、夫の母国フランスなどでチャリティーコンサートも開かせていただきました。東京カテドラル聖マリア大聖堂で祈りとオルガン演奏による瞑想「オルガンメディテーション」の企画にも携わっています。コロナ禍のため休止していますが、再開されたら、ぜひ多くの方に足を運んでいただきたいです。

振り返ってみて、ふと思います。「高3のあの時、レコードをかけていなかったら、私は一体何になっていたのだろう」と。まさに「運命の一曲」でした。

行く道を示してくれた両親に感謝しかありません。

あおた・きぬえ 1962年、福島県原町市（現・南相馬市原町区）生まれ。国立音楽大（武岡賞受賞）、リヨン国立高等音楽院卒業。パリ国立高等音楽院修了。ウィーン国立音楽大、ミラノで研さんを積む。第1回武蔵野市国際オルガンコンクール入選、武蔵野市長奨励賞受賞、第5回トゥールーズ国際オルガンコンクール2位入賞。NHK―FM放送、テレビ出演など国内外で演奏。国立音楽大講師。

「母校をたずねる」は次回から静岡県立掛川西高編を連載します。

先生は画家 おしゃべりも生徒育む

朝倉悠三氏が亡くなる数年前に描いた相馬野馬追の「神旗争奪戦」＝福島県南相馬市鹿島区の同氏アトリエで、高橋宗男撮影

青田さんは受験勉強が忙しくなる前まで、昼休みに美術部の部室に入り浸っていたそうだ。部員仲間や顧問の朝倉悠三先生（1940～2019年）とのおしゃべりが楽しくて仕方がなかったからだという。

朝倉氏は、原町高のほか浪江高や相馬高で教壇に立った画家で、多くの生徒に慕われた「名物教師」だった。今回の原町高編の取材過程でも、多くの卒業生から朝倉氏との思い出話が寄せられた。

2000年に定年退職した朝倉氏はその後、創作活動に専念した。地元の伝統行事「相馬野馬追」を好んでテーマに取り上げ、多くの馬絵を制作。日本中央競馬会（JRA）第13回全日本「馬の絵展」大賞、第35回全日本水墨画展大賞などを受賞している。

11年の東日本大震災後は東京電力福島第1原発事故の影響もあって南相馬市から会津若松市に1年間避難。その経験を基に自然の脅威や被災者の悲哀、政治への不信などを風刺画で表現し、19年3月まで地元紙・福島民報に410点が掲載された。

南相馬市博物館（同市原町区）は朝倉氏の風刺画と言葉で震災後の10年を振り返る「朝倉悠三震災絵日記」展を開催中だ。10月3日まで午前9時～午後4時45分。

＝この項おわり

原高史を編纂された若松丈太郎先生のこと

元教員　山崎健一さん　＝1963年度卒

福島県立原町高　寄稿 1

福島県立原町高等学校に教諭として勤務された若松丈太郎先生は、２０２１年4月21日、85歳で逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

先生は岩手県江刺市（現・奥州市）出身で福島大学を卒業され、緑が丘高校（現・東稜高校）、勿来高校、小高農工高校（現・小高産業技術高校）、相馬高校、原町高校に勤務されました。

原町高校に十一年間勤務

原町高校には、１９８３（昭和58）年4月から94（平成6）年3月まで11年間勤務され、図書主任や国語の授業、クラス担任で生徒はもちろん保護者の信望も大変厚く、学園祭の投票で人気先生ナンバーワンになったこともありました。学識豊かでありながら謙虚な方で、意見や考えを押し付けることもなく、若者や子どもたちを大事にされていました。

詩人としても高名

国語科教員の傍ら詩人として全国で高名なことは周知の通りです。チェルノブイリ原発事故を東京電力福島第一原子力発電所に重ねた詩「神隠しされた街」は、3・11の事故後世界で注目されています。昨年3月には11冊目の詩集「夷俘（いふ）の叛逆（はんぎゃく）」も出版され好評を博しています。歴史的に蔑まれてきた東北地方や故郷の奥州市、南相馬市をこよなく愛し、歴史や人物を発掘し、日本や世界の平和を願い、反戦、反核兵器、脱原発や憲法を守ることを詩作や評論で訴えていました。

三つの高校の校史を編纂

先生は勤務された相双地区の三つの高校でたまたま周年の時機に遇い、学校史の編纂に大きな足跡を残されたことを特筆したいと思います。

まず50年前の71年に、小高農工高校で編集責任者として創立60周年の記念誌を発行されました。私はその年4月に転入し、すぐ編集委員になりますが、全く力になれずに終わりました。

次に勤務された相馬高校では、78年に創立80周年を迎え初の学校史の発刊が計画され、先生が編集長に選ばれます。明治31年創立時からの資料を、相馬市内や福島市、各地の同窓生などを訪問し、探し出しに奔走します。

「人に会うのが苦手なのに、校史を聞き出すためにミニバイクなどで出歩いていました。誤りの無いようにかなり神経を使っていたようです」と、当時の様子を奥様が話されています。

こうしてB5判４３５㌻の相馬高校史「相中相高八十年」が発行されます。

さて、それから20年後に相馬高校は創立１００周年を迎え新規の記念誌を発刊することになりました。私も編集委員の一員でしたが、新しい資料の発見は見込めず、結局若松先生の御了解を得て、「八十年」をベースに編集することで進められました。

98年に１００周年記念誌「相中相高百年史」はB5判１１０５㌻の大冊として完成しますが、それは調査や記録が緻密だった「八十年史」があったからこそと、編集委員一同で大いに感謝したものです。

原高の校史編集に尽力

83年4月、先生は原町高校に転入されますが、なんと、そこでも学校史の編纂が待ち受けていました。

原町高校は89（昭和64・平成元）年に創立50周年を迎え、初の学校史の発刊が期待され計画されていました。当初編纂委員会が約20名で組織され、基礎資料の「原高新聞」などが収集されていました。しかし編纂委員は次々に転勤して入れ替わり、気付けば先生が編集の中心になっていました。

そもそも、学校史の発行にはその学校のプライドがかかっていて、伝統校であればなおさらのことです。でも教員としては学校史の編纂などは全く余分な仕事で、編集専任でもなく、授業や組担任、部活動の指導やその他の校務と重複しての作業ですから、家庭に持ち帰ることも多々ありました。

学校史の編纂自体が非常に困難な仕事で、資料を探し出し、校内外の事柄から取捨選択して執筆しますが、誇張も虚偽も許されません。資料の正確な整理、公正な分析など根気の要る本当に骨の折れる仕事です。

資料の収集に苦労

原町高校の場合は特に資料が極端に不足していました。39（昭和14）年の創立後間もなく戦争に突入し、また戦後の学制改革で県立相馬商業学校と町立原町女学校が合併して県立原町高等学校となったことの大混乱、北校舎の全焼や水害もあり、さらに小川町校舎から現在の西町校舎への移転で、大切な資料は散逸したり消失していたりしました。若松先生はじめ編集委員の先生方は、市役所や福島市の県立図書館、県教育センター、旧職員や同窓生、関係者を休日返上で訪ね歩き、苦労の連続だったと推測されます。

こうして原町高校の歴史は、『躍進・原高五十年の歩み』としてB5判・３２８ページで立派にまとめられ発刊されますが、これこそが原町高校の金字塔で、編集委員の努力と若松先生でなければ為し得なかった一大偉業です。

その後、原町高校では新たな学校史の発行は行われず、60・70・80周年の記念誌は『自由の鐘』ⅠⅡⅢとして発行されています。10年ごとの行事や写真、部活動の成績、教職員の動静、恩師の思い出や同窓生の紹介、大震災特集などを掲載しています。

若松先生は地元出身者でも同窓生でもありません。それでも、相双地区の県立の三つの高校の学校史編纂に心血を注がれたご功績に対し、改めて深い敬意と感謝の意を表したいと思っています。

ぐるっと東日本

母校をたずねる

原高4・11の悪夢事件！

タカノ楽器会長　高野建夫さん　＝1962年度卒

福島県立原町高　寄稿②

私は、1960（昭和35）年4月の入学生です。4月9日に入学式があり、翌4月10日は開校記念日で休校日でした。

その翌日、昼休みに「1年C組、高野建夫、至急補導室へ来い」と一斉放送され、訳も分からず向かいました。その席には、歴史担当の小林文雄先生、私の高校入学の際の保証人でもあった書道の高田豊記先生、国語担当の星千枝先生らが待ち構えていました。「入学早々、無免許で車を乗り回すとは何事だ」という話でした。

実は、私は中学時代から無免許のまま、当時発売されたばかりのスクーターを乗り回しては、警察にお世話になること数回、すっかり母に迷惑をかけておりました。心配した父の計らいで、縁戚でもあり、先日亡くなった朝倉悠三先生の仙台のご実家の住所を臨時にお借りして、仙台の自動車学校で220ccの小型バイクの試験を受け、無事一発で合格しておりました。

免許の交付を受けたのは4月8日のことです。というのも、私は4月3日生まれで16歳になっておりましたから、受験資格を有していました。「高校入学前の休日を無駄に過ごすな」という、父の指示に従ったのです。

当時、実家の楽器店の従業員には小型バイク免許を有する者がいなかったため、配達要員として私の下校を待っていたことや、その頃、東京電力福島第1原発の建設予定地になっていた大熊町夫沢まで配達に出かけたものです。

また、私の祖父が自転車による自損事故で脊椎損傷になり、10年間も寝たきりの生活でした。今のように整形外科やリハビリテーションの治療も充実していませんから、家族総出で介護し、中学生の私も祖父を背負って治療に通ったり、家業の手伝いもしたりする必要があったのです。

先生方に交付された免許証を見せて、こうした事情を話したところ、「補導室は了解したが、事故を起こさぬように」と注文をつけられました。

この悪夢のような事件が縁で、私はかえって小林先生のファンとなり、生徒会の人文科学部や新聞部の顧問として大変お世話になりました。

高校3年の10月になるや、「お前は生徒会活動にのめり込んでいるようだが、大学受験はどうするのだ」と聞かれ、即座に「私は先生のご出身の中央大学に行きたいです」と答えました。すると、先生は「よーし、わかった」とばかりに、受験時には大学の学友だった大蔵省印刷局の鈴木敏郎総務課長を紹介して下さり、受験前の10日ばかり、下宿させていただきました。大学合格後もしばらく鈴木さんや小林先生と交流が続き、心から感謝しておりました。

「4・11の悪夢」もこのような具合で、まんざらでもない結果になったと、しみじみ原高を懐かしんでおります。

＊2019年発行の『原高ものがたり80』への寄稿を転載

母校をたずねる

福島県立原町高 寄稿 3

原町高校〜福島医大〜地域医療の人材輩出、誇るべき母校

医療法人敬愛会理事長 菊池節夫さん ＝1964年度卒

改めて同窓会名簿を開きますと、相馬商業学校として開校以来80年を迎えたことを知りました。私自身、15歳の春、特に目的もなく原町の自宅から通えること、周囲の原町一中の同級生も行くからという理由で原町高校に入学し、１９７０（昭和40）年３月に卒業しました。

２０１５年に卒業後50年の節目にと、同級会を東京・浅草で開催。クラスの約半分が出席し、思い出話に花を咲かせ、ささやかな文集を作りました。本稿の機会に再読しますと、高校の３年間、クラス替えもなく、二本松義夫先生が担任として全精力を注いで指導して下さったこと、放課後の教室での談笑、力を合わせて参加した校内合唱コンクールやスポーツ大会の思い出がたくさん書かれています。当時流行した「高校三年生」の歌の通り、クラス仲間の団結の絆を形成できた原高でのあの時期が、我々の世代の人生の出発点であったと懐かしく回想されます。そして、卒業後まもなく、その素晴らしい恩師が若くして事故で亡くなられた悲報の記憶もよみがえりました。

私は福島医大に進学し、学生寮で２年先輩の島国義さん（現・ふりど循環器科医）と同室になり、当時創部間もなかったボート部に勧誘され入部し、いやいやながら練習を続けました。しかしこのボート部での鍛錬と部員との出会いが、その後の人生で大きく役立つ結果となりました。原高１年の教室で、恩師が「若者よ、躰を鍛えておけ」の歌詞を黒板に書いて、毎朝歌い、励ましてくれたことが、今につながっていると感じます。

原高の恩師でほかに印象深かったのが、左利きの英語担当の佐藤先生で、授業で教わった「渋いから痛いわい」のフレーズは忘れられません。

原高の同窓生で私と同じく福島医大に進学し、医師として県内で活躍している先輩後輩の諸氏も多く、特に公立藤田病院前院長の庄司光男先生、南相馬市立病院前院長の金沢幸夫先生、南相馬で開業されている先生方など、原高出身で医療の分野で活躍されている方々が多いのも、同窓生として誇りに思います。また、現藤田総合病院内科の鈴木修三先生の同級で、２０１７年に福島市長に選出された78年度卒の木幡浩氏は、震災後沈滞している福島で風格ある県都創りを目指して日夜奔走されており、特筆すべきです。

原高80年の歴史の中で、私は62（昭和37）年から３年間在籍し、卒業後は母校に貢献することもなく漫然と54年も過ごしてきましたので、同窓会活動に深く携わってこられた皆様には心から感謝申し上げ、原高同窓諸氏の今後のますますのご活躍を祈念いたします。私も体力の続く限り、医業を通して世の中に貢献したいと念じております。

＊２０１９年発行の『原高ものがたり80』への寄稿を転載